

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 27 日現在

機関番号：32608

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381091

研究課題名(和文) 乳幼児期における器楽活動プログラムの構築

研究課題名(英文) Establishing an Early Childhood Program on Musical Instrumental Activity

研究代表者

村上 康子 (Yasuko, MURAKAMI)

共立女子大学・家政学部・准教授

研究者番号：20458863

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、器楽活動の意義について関連領域から探り、フィールドワークとワークショップを通して、乳幼児期における器楽活動のプログラム構築を目指したものである。一連の研究を通して(1)身の回りの環境と関係を築いていく中で、子どもの音楽的な発達も生じていくこと、(2)実際に子どもたちが日常生活を行っている場で音楽表現の芽生えが生じていること、(3)音楽活動そのものが人間の感覚を拓いていくこと、の3点を指摘するに至った。

研究成果の概要(英文)：This study investigated the significance of instrumental activities from related domains, and aimed to establish a program on instrumental activities for early childhood through fieldwork and workshop. Over a series of studies, the 3 following points were pointed out: 1) Children's musical development occurs as they develop a relationship with their surrounding environment; 2) Musical expression begins to formulate while children are actually experiencing everyday life; 3) Musical activity itself expands the human senses.

研究分野：幼児教育 音楽教育

キーワード：器楽

1. 研究開始当初の背景

我が国の音楽科教育において、戦後大きな変貌を遂げたのが器楽教育である。特に近年、創作の活動や、我が国及び諸外国の様々な音楽を取り扱うことが学習指導要領に示されるようになり、身体楽器や電子楽器、和楽器や世界の諸民族の楽器の使用など、扱う教材、使用楽器の幅が広がられた。「多様な音楽のよさや美しさを味わう」という目的に合致する指導として器楽教育が果たす役割は大きい。他方、「極限まで拡張した『広く浅い』器楽体験が、音楽や器楽との『深いかかわり』を阻害する危険性を常に感じる必要がある(中地、2006)」という指摘もある。音楽科の時間数減に伴い、活動内容の精選を図らざるを得ない状況の中、学習指導要領に記載されている内容は拡充が図られており、学校現場では器楽活動そのものの意義が見失われつつあるように思われる。

他方、幼稚園教育要領の領域「表現」には「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」という観点が示されており、それを踏まえて保育現場ではたくさんの音楽活動が行われている。それらは、文化的枠組みにとらわれることなく子どもたちの多様な表現を読み取っていくこと、そして、それを出発点として「表現」を含めた子どもの全人的な成長を保証することが目指されているものである。しかし、幅広く広範な「表現」という概念の中で音楽活動の意義については、漠然とその重要性が語られているのみで、本質的な議論がされているとは言い難い。

音楽科教育で行われる音楽活動と保育の場で行われる音に関わる活動とはその目的が異なる。しかし、どちらも「音を使って表現する」というこの根本に変わりがあるわけではない。そして、どちらもその活動には大きな意義がある。本研究は発達研究・脳研究・臨床哲学研究などの関連諸領域の研究成果を基に、乳幼児期における器楽活動のプログラムを構築することを目的とする。

2. 研究の目的

本研究は、器楽活動の意義について発達の視点、脳科学的視点、身体論的視点、音楽教育史的視点等の関連領域から探り、フィールドワークとワークショップを通して、乳幼児期における器楽活動のプログラムを構築するものである。開発する教育プログラムは、従来、音楽科教育における器楽活動の内容・方法において欠如していたと思われる以下の3点を特に重視したものである。

- (1)音が出るモノ、楽器を用いた活動は他者との関係性を育む。
- (2)モノ・楽器を用いて音を鳴らすという行為は身の回りの環境と関わる事である。
- (3)モノ・楽器を用いて音を鳴らすという行為は自分自身の感覚を自覚するものである。

3. 研究の方法

研究は以下の(1)～(5)の段階を経て進めた。

- (1)これまで、国内外で発表された関連領域(発達研究・脳科学研究・臨床哲学研究・音楽教育史研究)の知見を整理し、器楽活動に関連する重要な理論の体系化を試みる。
- (2)国内外の保育現場、子育て支援活動、学校教育などで行われている器楽活動の実態把握と問題点の整理を行う。スウェーデン、フィンランド、インドネシアなどで器楽活動について調査を行う。
- (3)(1)(2)の成果、および、これまでの実践と研究成果をもとに、保育現場における器楽活動の実践プログラムを構築し、開発する。
- (4)(3)の成果を取り込み、実践の成果を検証する。実践の際の子どもの反応や効果を分析し、実践現場からの意見を反映させ、プログラムを再構成する。
- (5)保育現場や子育て支援の場、保育者の現職研修、また保育者養成校や教員養成課程、講座等でプログラムの実施を進め、その結果を評価・分析する。また、初等・中等教育における器楽活動の内容との整合性を図り、発達段階・学校段階を超えた器楽活動の意義について明らかにする。

4. 研究成果

- (1)プログラム開発のための基礎研究と知見の体系化

モノ・楽器を用いて音を鳴らすという行為は身の回りの環境と関わる事である

近年、心理学において人の発達と環境との相互作用についてさまざまな知見が示されるようになってきた。アメリカの知覚心理学者ギブソンは英語の afford(～ができる、～を与える)という動詞を名詞形にして「アフォードダンス affordance」という語をつくり出した。これは端的にいえば、「環境が人や動物に与える『行為の可能性』を意味している」(佐々木 2008)。例えば楽器は一般的に奏法が決まっており、そのように演奏するものと思いがちだが、子どもは「音楽を奏でる」以外の方法で楽器を使っていることが分かる。楽器がそこに存在しているがゆえに、これらの行為が行われる可能性も生じる。

また、人工知能の研究では 1980 年代後半から身体的重要性がうたわれるようになった。モノを使って音を出す、あるいは楽器を演奏するという行為は「実世界に働きかけ、相互作用を通して感覚刺激をつくり出す」行為である。それと同時に「環境に影響を及ぼす」(Pfeifer & Bongard 2010) 行為である。身体を有するヒトであるがゆえに行為を行うこと、そしてその結果生じた環境の変化を学習し、発達していくことが明らかにされている。

これらの研究が示すように、乳幼児が新たに出会った世界でモノ・環境を探索することは、自分が運動することによって自分に返つ

てくる感覚のダイナミックな変化から、環境の中に存在する自己に気付いていく過程でもある。乳幼児はこうして主体的に環境を探索しながら、環境に働きかける存在としての自己を確立し、意志をもって環境に働きかけていく人として育つ。他の感覚と比較して胎児期から多くの経験を積んでいるのが聴覚であり、乳幼児にとって「音」を介してモノ・環境と関わることには大きな意味がある。ここでは環境に主体的に関わりながら心と身体を育てるという観点から、乳幼児期の器楽活動プログラムを検討した。

モノ・楽器を用いて音を鳴らすという行為は自分自身の感覚を自覚するものである。人は五感や体性感覚（平衡(へいこう)感覚、空間感覚など）などの多数の感覚を使って身の回りの環境を、あるいは、環境の変化を捉えていく。このことを多感覚情報の統合または感覚融合認知などと呼ぶ。それとは別に、人にはある感覚の情報から他の感覚の情報を補完して身の回りの事象を捉えていく特性がある。これを感覚間相互作用（クロスモダリティ）という。モノを使って音を鳴らす、あるいは楽器を演奏するという行為は、多感覚情報の統合を必要とする行為である。また、クロスモダリティを意識した器楽活動を検討することができる。

音が出るモノ、楽器を用いた活動は他者との関係性を育む

乳児は環境との相互作用を通して身体の発達とともに認知機能の発達も促される。例えば9か月頃になると、母親（養育者） 子どもの二項関係から、「注意共有対象」を介した母親 注意共有対象 子どもという三項関係を築いていく。9か月の乳児は、自分が見てほしいものを他者に向かって指差しするようになるといわれているが、これは共同注意といってモノを介して他者との関係をつくり出している。他者とモノとの関係を通して自らが関わる世界を広げていくためだけでなく、他者理解のための最初の重要な発達でもある。こうした環境との相互作用を通して、乳児はモノや環境、そして他者と意図をもってコミュニケーションする人に育っていくのである。三項関係や共同注意については、実態のあるモノやヒトを中心に語られることが多いが、モノから音が生じると、モノだけでなく音も「注意共有対象」となり得る。音を使ってコミュニケーションを図るアンサンブルなどを考える際にも、「三項関係」は欠かすことができない視点である。

モノを探求することは、モノと関わる多様な方法を自ら見いだしたり、モノから生じるさまざまな事象の変化に気付いたりして、環境を知り自己を知ることにつながる。これは楽器を前にしたときでも同じであろう。実は演奏家も楽器と関わる自分の身体の使い方を省察しながら楽器を探求し、音を判断し、そ

の楽器で奏でることのできる最もいい音を探求している。音を介して環境と向き合い自己と向き合う、自己の経験を基に他者のすばらしさを感じ取る、そして音や音楽への興味や、演奏家への憧れなどを感じる子どもたちの感性の中に、楽器を演奏するうえで必要な資質と能力の源があると考えられる。その資質と能力を高めることこそが器楽指導に課された責務であるといえよう。

何らかの楽曲を演奏するうえで、正しい楽器の使い方や楽譜どおり正確に演奏することは必要である。しかし、楽器そのものを探索し、音を追及することなしに楽器の奏法を教えられることで、気付きの場を失うことも起こりうる。自己の感覚を研ぎ澄ますという視点を基盤に、楽器の奏法を学びたい、あるいは楽器を使って楽曲を演奏したいという動機を育むこと、そのうえで技能の習得に向けた指導をしていくというように、子どもの発達段階と場の状況、さらに子どもの姿から、子どもと楽器との関わりをデザインしていかなければならない。

(2) 保育現場における器楽活動の実践プログラムの提案

子育て支援活動において、1)参加者である子ども一人一人が五感を使って楽器を探求すること、2)様々な楽器に直接触れて音を体感すること、3)様々なモノから生じる音に興味を持つこと、この3点を楽器使用の主な目的とし、ダンボールで作られた同じような形態（穴の開いた直方体）の製作物をカホンの隣に置いたり、カラブロックの間にドレミパイプを置いたりして、子どもの楽器の扱い方が幅広くなるようなプログラムを提案した。その結果、子どもたちが、保護者やスタッフからの働きかけを受けつつも、思い思いの方法で楽器に触れていた。また、活動の場で響いた音に気付き、他者の遊んでいる楽器を遠くから見つめたり、楽器に近づいて行ったりした子どももいた。音、楽器に興味を持った瞬間であり、音を介して他者の行為に興味を持った瞬間であったと言えるであろう。楽器を「演奏するもの」と限定的に使うのではなく、子どもが探求すべきモノであると位置づけること、そして、モノを探求する中で生じる音とその特性に着目して働きかけていくことが重要ということを指摘した。

幼稚園・こども園等で参加者の年齢に応じ、以下の内容を意識してワークショップを行った。

- 1) 楽器に触れる前に聴覚に集中する時間を作り、音を聴くことに意識を傾ける。
- 2) 楽器に対して視覚的な集中を高めるように楽器を提示する
- 3) 楽器の一般的な奏法にとらわれることなく、楽器というモノとの多様なかわり方を提示する。

その結果、子ども達は自らの身体感覚を総動

員しながらイメージを広げたり表現したりし、同時に音を通して他者とかわり、相互作用している。乳幼児期における楽器を用いた活動の展開には、楽器の正確な操作や楽曲の演奏ということの前に、こういった、モノとかかわる身体の感覚を研ぎ澄ますという視点や、音やモノを介したコミュニケーションという視点が重要となる。感覚に直接働きかける音の力を重視し、モノと出会い、それと深くかわる子どもの姿に目を向ける必要があるということを指摘した。

(3) 研究のまとめと今後の展望

乳幼児期の音楽発達に関する研究は、音楽の構造をどう認知するか、作品をどう認知するかという点に集中しがちである。しかし、言語発達や脳科学、あるいは臨床哲学の近年の研究動向を視野に入れたことで、音を介した表現そのものの中に、人間関係論的視点と身体論的視点が含まれていく。その結果、子どもが人を含めた身の回りの環境と関係を築いていく中で、音楽的な発達も生じていくこと、そして、実際に子どもたちが日常生活を行っている場で音楽表現の芽生えが生じていること、さらに、音楽活動そのものが人間の感覚を拓いていくこと、を明らかにすることができたと考える。保育現場のみでなく、初等・中等教育、さらには教員養成にも還元される研究成果といえよう。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計14件)

石川眞佐江、今川恭子、小川容子、志民一成、丸山慎、村上康子(2015)「共同企画 パネルディスカッション それって音楽性？ 人・音・環境の動的関係性を調律する musicality は資質を支える概念か」日本音楽教育学会第45回大会 パネルディスカッション、平成27年10月4日、於：宮崎シーガイア・コンベンションセンター(宮崎県宮崎市)

石川眞佐江、村上康子(2015)「2歳児の楽器遊びにおけるモノとのかかわりの特徴 既知の楽器と未知の楽器へのかかわりの差に着目して」日本音楽教育学会第46回大会 平成27年10月4日 於：宮崎シーガイア、コンベンションセンター(宮崎県宮崎市)

Yasuko MURAKAMI (2015) Case Study of Sound Playing with a Focus on Interaction with the Environment: Considering Musical Activities in Child Education 10th Asia Pacific Symposium on Music Education Research 平成27年7月12日 於:The Hong Kong Institute of Education (香港)

村上康子、石川眞佐江(2015)保育における音あそびの展開 音を通してモノ・環境との関わりを深める試み 日本保育

学会第68回大会口頭発表 平成27年5月9日 於：椋山女学園大学(愛知県名古屋)

Yasuko MURAKAMI、Masae ISHIKAWA(2014) Two-Year-Old Children's Interaction with Musical Instruments Pacific Early Childhood Education Research Association 15th Annual Conference 口頭発表 平成26年8月4日 於：Inna Grand Bali Beach(インドネシア パリ島)

今川恭子、坂井康子、村上康子、丸山慎(2014)「赤ちゃんと言語 - 音楽に関する赤ちゃん学を現場に生かすために必要なこと -」日本赤ちゃん学会第14回学会大会 ラウンドテーブル 平成26年6月22日 於：日本女子大学(神奈川県川崎市)

村上康子、石川眞佐江(2014)「保育における楽器を用いた活動の展開 子育て支援活動における環境設定の工夫」日本保育学会第67回大会 平成26年5月17日 於：大阪総合保育大学(大阪府大阪市)

今川恭子、鹿倉由衣、石川眞佐江、村上康子、志民一成、丸山慎(2013)「共同企画 パネルディスカッション：身体、モノ、音、それってアフォーダンス？」日本音楽教育学会第44回大会 共同企画 平成25年10月13日 於：弘前大学(青森県弘前市)

村上康子、石川眞佐江(2013)「保育における楽器を用いた活動の展開 子どもの身体感覚と他者との関係性に着目して」日本保育学会第66回大会口頭発表 平成25年5月12日 於：中村学園大学(福岡県福岡市)

石川眞佐江、村上康子(2013)保育における楽器を用いた活動の展開 打楽器を中心としたワークショップ実践の提案、日本保育学会第66回大会口頭発表 平成25年5月12日 於：中村学園大(福岡県福岡市)

〔図書〕(計2件)

今川恭子監修、志民一成・山原麻紀子・長井覚子・木村充子・藤井康之編、教育芸術社、音楽を学ぶということ これから音楽を教える・学ぶ人のために 2015年、150頁

本多佐保美・西島央・藤井康之・今川恭子編、開成出版、戦時下の子ども・音楽・学校 国民学校の音楽教育、2015年、392頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村上 康子 (Yasuko MURAKAMI)
共立女子大学・家政学部・准教授

研究者番号：20458863

(2)研究分担者

藤井 康之(Yasuyuki FJII)
奈良女子大学・人文科学系・准教授
研究者番号：40436449

石川 眞佐江(Masae ISHIKAWA)
静岡大学・教育学部・准教授
研究者番号：80436691

山中 和佳子(Wakako YAMANAKA)
福岡教育大学・教育学部・講師
研究者番号：20631873

齊木 美紀子(Mikiko SAIKI)
田園調布学園大学・子ども未来学部・准教授
研究者番号：40586418

長井 覚子(Satoko NAGAI)
白梅学園短期大学・保育科・講師
研究者番号：60609923

(3)連携研究者

今川 恭子(Kyouko IMAGAWA)
聖心女子大学・文学部・教授
研究者番号：80389882

志民 一成(Kazunari SHITAMI)
静岡大学・教育学部・教授
研究者番号：0320784

木村 充子(Mitsuko KIMURA)
桜美林大学・芸術文化学系・准教授
研究者番号：60550879